上に登場する。これらの集團は、黄巣の亂中に李克用を中心とする沙陀勢力に吸收され、この結果、沙陀勢力が大いに伸張したと推測される。ただ、ソグド系突厥の集團としての消息は、列傳に見える個人的情報を除くと、編纂史料からはうかがえなかった。ところが近年公刊された石刻史料により、十世紀初頭において「索葛部」や「鷄田部」という集團が河東地域北部に存在していたことが明らかとなり、後晉時期にいたるまで沙陀勢力の軍事的根幹を構成していたと考えられるのである。

南宋における湖北會子の展開

金子泰晴

湖北會子とは、南宋第二代孝宗初年である隆興元年（西暦一一六三）に、湖廣總領（長江中流に駐屯する軍隊への補給機關）の王珏（おうかく）がはじめて發行し、湖北路・京西路一帶（現在の湖北省附近）で流通させ、鄂州（がくしゅう）（現在の武漢）において兌換を行った紙幣である。この湖北會子は、流通地域が南宋經濟の中心である長江下流から離れていたこと、全國的に流通したとされる行在（あんざい）會子に比べて發行規模が小さいこと、それに比例して殘存史料が少ないこともあって、從來あまり研究の對象とされてこなかった。

私は以前、湖北會子發行の經緯について、南宋の長江中流における兵糧補給體制整備の觀點と、南宋における地域流通圏の觀點から檢討を加えたが、なお部分的なものに止まった。

そこで今回の發表では、湖北會子發行の政治的背景について檢討すると共に、湖北會子のその後の展開、特に南宋中期における湖北會子の發行過剰に伴う湖北會子の回收、行在會子發行の動きを檢討し、長江中流の補給體制に關する南宋政權の政策を論じたい。

余懷と冒襄
――清初江南遺民の「風流餘韻」をめぐって――

大木康

冒襄（一六一一～一六九三）と余懷（一六一七～一六九六）どちらも明末の南京に若き日を過ごした經驗を持ち、明の滅亡の後には清に仕えず、遺民としての生涯を貫いた人々である。そして片や余懷は南京秦淮の様子を克明に描き出した記錄『板橋雜記』を著し、片や冒襄はもと秦淮の妓女であり、後に側室となった董小宛の思い出をつづった『影梅庵憶語』を著している。韓英は冒襄の墓誌銘（「潛孝先生冒徵君襄墓誌銘」）において、「冒襄が亡くなったことにより、東南故老遺民の風流の餘韻は絶えてしまった」と記している。一口に遺民といっても、その生き方にはさまざまなスタイルがあったわけだが、この二人は、たしかに「風流遺民」とでも呼ぶことができる、清初期の文人の一つのタイプを代表しているといえよう。

錢謙益と柳如是、龔鼎孳と顧媚などの關係を擧げるまでもなく、